

東日本大震災 学童保育の一日も早い復旧・復興を願って⑨

宮城県での支援活動の経緯と現状

池川 尚美

宮城県学童保育緊急支援プロジェクト

東日本大震災から間もなく、一年を迎えようとしています。毎日、必死の思いで生きて迎えた夏。秋になり、なんとか生活らしさが整うと同時に訪れた将来への不安と疲れ。そして仮設住宅の冷え込みが身にしみる冬。時間がたつにつれ、課題も変化した一年でした。

第二回宮城県学童保育講座（以下、講座）が開かれたのは、二〇一一年の一月のこと。「県内の学童保育のネットワークを作ろう」と話し合った矢先の震災でした。

沿岸の被災した地域での電話回線復旧を待って、講座参加者に安否確認を行うと、講座で一回会ったきりの指導員さんたちが、電話の向こうで堰を切ったように話し続けたことをはっきりと覚えていきます。

宮城県学童保育緊急支援プロジェクト（以下、プロジェクト）の活動は、県内各地に点在する講座参加者を訪ねることから始まりました。訪問をきっかけに、震災当日のことを初めて口にしたという指導員さんも少なくありません。それまで指導員同士でも当日のことを語り合えずに過ごしてきたと気づき、話すことで気持ちや和らいだようです。子どもと毎日接する指導員さん

解決策を探る支援も実施しました。訪問できたところは少なかったのですが、一人ひとりの指導員さんに何かが確実に伝わったようです。支援する私たちも、学童保育の普段通りの生活を整えていくことが子どもたちに必要なことであると確信するに至りました。

プロジェクトの支援活動は、各地の担当課や指導員さんと直接つながり、現場からの声を受けとめ、支援に反映させることをめざしています。研修会前後の交流会の企画や、研修会の会場確保、他地域の指導員さんとの連絡など、積極的に協力してくださる指導員さんの輪も少しずつ広がっています。

二〇一一年一〇月に開催された全国学童保育指導員学校東北会場では、沿岸市町の指導員さんの参加費を支援したほか、送迎バスを用意し、被災した地域からも多数の方が参加していただきました。県南部からのバスには、福島県新地町の指導員さんも乗り合わせ

ることとなり、その手配は現地の皆さんにお願いしました。宮城県子育て支援課の協力のほか、被災した地域の担当課の方々が参加者の取りまとめをしてくださったこと、会場の宮城学院女子大学が講堂を無償提供し、交通整理員の配置も行ってくださるなど、全面的に協力してくださったことも大きな力となりました。

東北の指導員さんが共に学び合い、それぞれの現状を理解し合った指導員学校。貴重な休みを返上しての学習となりましたが、学ぶことの意味を体感した指導員さんたちの、帰り際の晴れとした笑顔が忘れられません。

年が明けて二〇一二年一月二二日、地震による大きな損害を抱えながらも、県内外から避難者や転入者を受け入れている県北部で、第三回目の宮城県学童保育講座を開催しました。前述の指導員学校同様、沿岸の被災した地域からの参加者には、参加費と交通手

んが一日も早く回復し、落ち着いた学童保育の生活を取り戻すことが、子どもたちの安定につながる大きな力になると、その後の支援は指導員さんとの懇談と研修が中心となりました。

被災した地域の担当課と学童クラブへの訪問は、経験豊かな全国の指導員さんを講師に各市町で開催された指導員研修として結実し、石巻市では、NGOセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの協働で、継続的な研修の展開が可能となりました。震災後、混乱していた指導員さんも、「子どもたちの命を守りその生活を支える」という学童保育の仕事の意味を研修であらためて確認し、意欲的に参加してくれました。

しかし、不安定になりがちな子どもや保護者の方々を支える仕事における迷いは、簡単に解決できるものではありません。講義形式の研修と平行して、講師が現場を訪ね、子どもたちとともに過ごす中で各クラブの課題を共有し、

段の支援を行いました。前回から丸一年後に行われた講座でしたが、参加者一人ひとりが他の自治体の学童保育にも関心を持ち、ともに向上しようとする姿が鮮明になってきていることを感じました。地理的な条件で今回の参加がむずかしかった県南部では、複数の自治体の児童館館長が、プロジェクトの支援をもとに、県南地域での指導員研修を計画中です。

宮城県内の学童保育は、おやつを出さない、保護者の会がない、指導員の不安定雇用等々、制度そのものが貧弱なところが多いのが現状です。復興には学童保育の質の向上がかかせません。厳しい財政の下でも、指導員自身の自己研さんや、保護者や地域とのつながりが必須です。支援から共助への転換を意識しつつ、長いスパンで支援活動を継続していきます。全国の皆様には、引き続きのご支援賜りますよう、お願い申し上げます。